

第二次世界大戦期における 「戦勝祈願」のカムイノミをめぐって

小 川 正 人

目次	I はじめに
	II 「戦勝祈願」のカムイノミの事例
	III 「戦勝祈願」のカムイノミの周辺
	IV むすび

キーワード：アイヌ史、第二次世界大戦、カムイノミ

I はじめに

1. アイヌ民族の体験記録や伝記的な文献、あるいはルポルタージュなどをひもとけば、個々人の戦争体験をいくつも見いだすことができる⁽¹⁾。他方で、かかる記録などから考察すべき課題を摂取し、当該時期のアイヌ史像を描こうとした歴史研究は乏しいと言わざるを得ない⁽²⁾。

比較的好くまとまっているアイヌ史の概説書は、「日中全面戦争開始後は、『大日本帝国』『神国』日本への忠誠を強要され……差別にたいする不満や怒りさえも公然と表現することは不可能な状態におかれていった」「アイヌの青年たちもまた、『皇軍の兵士』としてあいついで戦場へかりだされていった」「アイヌの青年たちは、一方で『旧土人』『保護民』と差別されながら、他方でその差別をつくりだしている絶対主義天皇制国家と『大和民族』のために他民族と戦い、死ぬことを強いられたのである」「それだけに、この期のアイヌ民衆の苦しみは、和人民衆の苦しみよりはるかに大きいものとなった」⁽³⁾と記している。かかる把握は間違いではないと思うし、主要な論点を押さえているとも考えるが、しかしいかにも抽象的な記述である。もっぱら戦争への「動員」の徹底ぶりや過酷さを強調する視点にとどまっていることも特徴である。そもそも、同書巻末の年表を見ても、1937年「北海道旧土人保護法」改正までが比較的详细であるのとは対照的に、

(1) 本稿で参照、引用した文献の他にも、『エカシとフチ』、札幌テレビ放送、1983年、所や橋本進編『沖縄戦とアイヌ兵士』、草の根出版会、1994年、などがある。こうした記録の集積が今後いっそう必要である。

(2) 近年ようやく、高木博志「ファシズム期、アイヌ民族の同化論」（赤澤史朗・北河賢三編『文化とファシズム』、日本経済評論社、1993年、所収）という仕事も現れたが、その主題は1937年「北海道旧土人保護法」改正前後の「同化論」の検討にあり、当該時期のアイヌ政策やアイヌ民族の動向を捉えようとしたものではない。

(3) 榎森進『アイヌの歴史』、三省堂、1987年、218～219頁。

これ以降日本の敗戦までの期間は「ジョン・バチエラー、戦争切迫のため日本を去る」という記述(1940年)があるのみ⁽⁴⁾で、基礎的な事実の調査・確定が依然として課題である。

筆者もまた、いわゆる戦時下におけるアイヌ民族の問題については断片的に触れたことがあるに過ぎず⁽⁵⁾、今なお、この時期のアイヌ史を見通す視点をつかめずにいる。

2. あれこれと迷いながら戦争とアイヌ民族の関わりに関する文献を通覧する中で、川上勇治がコタンから出征する兵士を送るカムイノミや「戦勝祈願」のカムイノミについて調べている姿に出会った⁽⁶⁾。

日本国家による侵略を蒙ったアイヌ民族が、日本の「戦勝」を「祈願」する——それは、アイヌ政策の徹底ぶりとアイヌの「国策協力」の一典型といってよい姿ではある。ただ同時に筆者が着目したのは、川上勇治が、出征兵士を送るカムイノミの言葉の中に「一日も早く戦争が終わり……部落から戦場に出ている若者達全員無事帰れるよう」という一節があったと回想していることである。このような意味の言葉は、この時期(1944年2月頃)日本語でならば人前で口にすることは難しいのではないか⁽⁷⁾。この言葉を語ったエカシの気持ちがどんなふうだったのかは確かめられないけれども、ここには、出征兵士の壮行という「国策」に則ったものとは異質な要素が現れているように思うのである。

アイヌプリによる「戦勝祈願」の実態をつぶさに見ていくことで、戦争へのアイヌ民族の動員、あるいはアイヌ民族の戦争への「協力」の様子を捉えつつ、しかしそれにとどまらない様相をもうかがうことはできないだろうか。本稿はこんな問題関心を契機にしている。具体的には、文献資料と若干の聞き取り調査とによってその実態を把握するとともに、これにアイヌ民族をめぐる政策動向などを重ねあわせることによって、さきの大戦とアイヌ民族との関わりについて、総動員政策の徹底ぶりを指摘し批判するだけにとどまらない歴史像を描く手がかりを得ようとするものである。

3. もとより、アイヌ民族といわゆる15年戦争の関わりについては、軍隊での体験やコタンでの「生産動員」など多くの重要な問題があり、本稿はその一端をなぞるにすぎない。実際、筆者は

(4) 最近の仕事になる東京都立大学人文学部小沢ゼミ「差別と侵略の教育史年表」、『人文学報』240号、東京都立大学人文学部、1993年3月、の中の「アイヌ教育」(48～49頁)においても、掲載している事項は全体(1931年～45年)で10にすぎず、1940年以降ではわずかに3つである。

戦時下のアイヌ民族に触れる記述の多くが、個別の体験や、「満州」開拓団へのアイヌの参加などの象徴的な事例の引証にとどまっていることも、かかる状態の結果であろう。

(5) 小川正人『アイヌ教育制度』の廃止—『旧土人児童教育規程』廃止と1937年『北海道旧土人保護法』改正—『北海道大学教育学部紀要』61号、北海道大学教育学部、1993年6月、72頁、および同「徴兵・軍隊とアイヌ教育」『歴史学研究』649号、青木書店、1993年9月。

(6) 川上勇治・葛野辰次郎(対談)「アイヌ語よ、力強くはばたけ」アイヌ民族の現在と未来を考える会編『明日を創るアイヌ民族』、未来社、1988年、156～157頁。

(7) 川上勇治『サルウンクル物語』、すずさわ書店、1976年、241～242頁。この点については、前掲小川正人「徴兵・軍隊とアイヌ教育」、46頁でも触れたことがある。

なお川上勇治さんから聞いたことによれば、このころ少年だった川上さんにはカムイノミの言葉が逐一理解できたわけではなく、同書の記述は、「だいたいこういう意味のことだった」というふうな記憶によるとのことだった。だが、その後黒川せつさんにこの点を確認すると、貫気別(ぬきべつ)でも出征兵士を送るカムイノミにそのような意味の言葉があったとのことだった。

本稿のための調査の過程で幾人かの方から聞き取り調査を行なったけれども、そこで聞いた、それぞれの方の大切な、あるいは思い出すのもつらいような記憶の数々に比べれば、筆者が主題に据えたカムイノミなどは、その中ではほんのひとコマに過ぎない。そんなひとコマにも歴史をひもとく手がかりはあるということを示すのが本稿の一つの狙いではあるけれども、語って下さった史実の多さに比べて、この小論で筆者が果たせることは僅かであることは銘記しておきたい。

II 「戦勝祈願」のカムイノミの事例

1. 「戦勝祈願」のカムイノミについて、筆者が調べた限りでの事例を列挙する。

ア：1943年12月8日、長万部飯王（いいなり）神社で挙行されたもの。

「大詔渙発記念日」すなわち対米宣戦布告2周年を記念したもので、祭主は司馬力弥、同町旭浜のコタンの者たちが参加したという⁽⁹⁾。飯王神社は同町で最も古い神社であり(1773年創建)、1930年に長万部村(当時)の村社となっている⁽¹⁰⁾。

『北海道新聞』はこのカムイノミを「パセカムイノミ祭」と報じ⁽¹¹⁾、「このお祭は、アイヌ達が国に一大事が起った時に、ウインクルトノといふアイヌの軍神にお願いするお祭なのです。このウインクルトノといふ軍神は、大昔アイヌの国を守ったばかりでなく、樺太や大陸のダツタンや、又太平洋に面する北の国々まで征服したといふ英雄だつたのださうです」との説明⁽¹²⁾を加え、「この軍神にまで大東亜戦争の勝利を祈るアイヌ達の心持ちは本当に立派でありませんか」と結んだ。

この記事のいう、「パセカムイノミ」の「パセ (pase)」(尊い)はすぐ理解できるが、「ウインクルトノ」がどういうカムイを指すのか筆者にはよくわからない。奥田統己さんの教示によれば、「ウインクル」は「オインカラ oinkar」(～を見る／見守る)を新聞記者が聞き誤ったのだらうと推測できるとのことだが、それがこの地域のアイヌの伝承において上述のような「征服」を果たす「英雄」だと考えられているのかどうか、「太平洋に面する北の国々まで」という「征服」の範囲もいかにもこのときの戦争と重なっており、わざとらしさを感じる。

このカムイノミの挙行に際して行政側から何らかの関与があったのかどうか確認できない。

(8) 1940年の同村の地名改正において設定された字名で、それまでの川向、前浜、キイケハンケなどがその範囲である。北海道では近代以降一貫してこうした地名の「改正」が進行しているが、いわゆる戦時下にこれを行った町村が少なくない。

(9) 長万部町史編集室編『長万部町史年表』、長万部町、1973年、152頁。

(10) 長万部町史編集室編『長万部町史』、長万部町、1977年、352頁。

(11) 「パセカムイノミ祭」『北海道新聞』1942年12月13日付夕刊。

(12) かかる記事の説明は、果たしてアイヌがそのとおりに語ったものなのかどうか定かではない。新聞記者らの憶測が強く入っていることは十分に予想できるし、司馬たちが故意に「戦勝祈願」の主旨にそのような説明をした可能性もある。

ただ、1940年には「紀元二千六百年の記念事業」として長万部のアイヌによる納税組合が発足しており、これには当時同村役場に勤めていた江賀寅三らが指導的な役割を果たしたようである⁽¹³⁾から、「戦意高揚」をうたう「国策」に積極的に呼応しようとする動きがこの地域のアイヌの中にもあったことは確かだろう⁽¹⁴⁾。

イ：1944年3月25日 平取村義経神社で挙行されたもの。

このとき北海道新聞社北方研究室のメンバーだった後藤寿一の見聞による、比較的まとまった記録がある⁽¹⁵⁾ので、やや詳しく紹介する。

後藤によれば、この「戦勝祈願祭」は「平取村在住」のアイヌの中の「有力者たる古老によって考えられ企画されたもの」で、「努力し協力した」者として次の氏名を挙げている。

平村幸作、平村一郎、平村金太、平村栄吉（以上平取）、阿部哲次郎（紫雲古津）

貝沢清太郎、二谷一太郎⁽¹⁶⁾、貝沢久之助、貝沢イソンノアシ（以上二風谷）

川上サノウク（荷負^{に おい}）

これらのメンバーのプロフィールを知ることは、こうした儀礼の担い手の位置を通して近代のアイヌ社会の様子を調べる点でも重要だろうが、今の筆者には僅かな情報しかない。それでも、貝沢清太郎は二風谷や近隣でのアイヌブリの儀式には必ずといってよいほど参加していたといい⁽¹⁷⁾、川上サノウク、平村金太はこの北方研究室による他のアイヌ文化の調査にも多くの知識を提供している⁽¹⁸⁾から、伝統文化への造詣やそれを重んじる意識は確認できよう⁽¹⁹⁾。

「戦勝祈願祭」の手順は次のようである。「数日前から平村栄吉宅に於て」準備を進め、当日「参集」したアイヌは「男女無慮四十名」、「全員出発に先だって簡単なカムイノミ」を行なって⁽²⁰⁾ 義経

(13) 梅木孝昭編『江賀寅三遺稿 アイヌ伝道者の生涯』、北海道出版企画センター、1986年、238頁。

(14) もっとも江賀は、「これによってウタリの団結心を養う」という狙いもあったと述べており（同前、238頁）、ただ「国策」に乗ったとばかりは言えない側面もうかがえる。

(15) 後藤寿一「戦勝祈願祭資料その他」『北海道先史時代考 1』、北海道出版企画センター、1976年、146～153頁。本資料は米田優子さんの教示による。原資料は北海道新聞社北方研究室調査資料。以下、この資料からの引用については原則として逐一の註記を省略した。

北海道新聞社北方研究室については、『北海道新聞社寄贈資料目録』（北海道開拓記念館一括寄贈資料目録 第5集）、北海道開拓記念館、1972年、特に同書巻末の桑原真人「北海道新聞社旧北方研究室について」（19～23頁）、を参照。

(16) 後藤が記した名は「市太郎」だが、『二風谷』（二風谷自治会、1983年）や二風谷小学校の「創立七五周年記念誌」（1968年）などによって確認した限りでは「一太郎」のようである。

(17) 川上勇治さん、黒川せつさんの談による。

(18) 前掲桑原真人「北海道新聞社旧北方研究室について」。

(19) この中で筆者が注目するのは貝沢久之助で、筆者の知る彼の姿には、アイヌ伝道団の機関誌『ウタリグス』や北海道アイヌ協会機関誌『蝦夷の光』に文章を寄せ、1927年当時には警察当局のマークも受け、いっぽう二風谷青年団の団長や在郷軍人会平取分会の理事をつとめ、いち早く炬燵きの家屋に暮らすなど多様な側面がある。一見多面的なこれらの行動は、シャモに互して生きようとした意識に根ざす点で一貫していたと筆者は理解しており、この「戦勝祈願」への参加は、かかる意識の彼なりの発揮であろう。そういう彼にしてもこうしてカムイノミを行っている点に、シャモの暮らしぶりを積極的に採用することと伝統文化とが複雑に共存する当時の状況をうかがい知るひとつの鍵があると思うのである。

なお、貝沢久之助については前掲小川正人『『アイヌ教育制度』の廃止—『旧土人児童教育規程』廃止と1937年『北海道旧土人保護法』改正—「徴兵・軍隊とアイヌ教育」によった。

(20) このカムイノミを行った場所は明記されていない。おそらく平村栄吉宅（のヌサ）かと推測する。

神社へ向かい、神社境内のベンリウクの碑⁽²¹⁾の前で「祈願祭」を行なう。「祭壇」(ヌサ)については「東に向かって作られる」とあるのみで場所を明記していないが、おそらくここに設置したと推測する。「祭壇」に用意したイナウは6本×5組、6本がまつる神は「トマリカムイ」(後藤の記録によれば「港の神」)。以下、特に断らない限り同様である)、「ペトロン」(後藤は「水の神」とだけ記しているが、おそらく「ペッ オロ ウン (pet or un) カムイ」で、「港の神」との対比では「川の神」とみるべきだろう)、「チェーホロカッケイナウ」(後藤はこのイナウの神を記していない。萱野茂によれば、「チェホロカッケイナウ」すなわち「逆さ削りのイナウ」で、「用途は多く……火の神やアパサムンカムイ(入り口を守る神)にも、また、沢のそばの水の神や家のロルンブヤラ(上座の窓)にも建てるなど」の用途があるという)⁽²²⁾、「ハシナウコロカムイ」(「山の神」)、シランバカムイ(「木の神」)、ヌサコロカムイ(後藤は「火神の次に位する神」とだけ記しているが、「ヌサ」すなわち祭壇の神)、である。なおこのとき使用したイナウのうち3本を北海道開拓記念館が保存している⁽²³⁾。このほかに「祭壇の左端に寄った所」に「チニシュツカムイ」という「よもぎで作った人形」を置いている。この人形についても詳しいことはわからないが、「模造の太刀」をはいている様子からしても、「人間の手に負えぬ様な悪神や魔物を退治するためだけに作られ、やたらに作ることは禁忌とされている」⁽²⁴⁾。いわゆるヨモギ人形であろう。この人形は「戦争が勝利に終わるまで」保管し(今回の場合は平村金太の家に保管したという)、「戦勝の暁」には盛大な儀式によって葬る(後藤はこれを「焼却する」と記しているから、いわゆる送り儀礼を指すのだろう)予定だったという。敗戦後どうなったのか興味深い、確かめることはできなかった。

イナウを並べ立てたのち、「長老を先に……男子の後には女子が続く」ように並び、「行進」をする。これは沙流川筋でニウエンホリッパ(niwen horippa:威嚇する 跳躍)あるいはウニウエンテ(uniwente:互いに威嚇しあう)などと呼ぶ、いわゆる悪魔払いの踏舞行進であろう⁽²⁵⁾。男は佩刀し「刀を抜いて持ち前へ突出す動作で進む。女子は刀を持たぬだけで動作は刀を持ったのと同様の動作をする」という後藤の描写も、おおむねこの踏舞行進の様子に合致する。この場合、行進によって威嚇すべき「魔物」は「敵国」であるということになるのだろう。

(21) ベンリウク(1833~1903年)の碑は1934年の建立になるもので、平取村長の名による碑文は、特に「学校ヲ設立シテ弟ノ就学ヲ勸」めたことと、1884年に小松宮が彼の家に「御立寄」し「優渥ナル御誼ヲ賜ハ」ったという「榮譽」とを讃えている(碑文は萱野志朗「歌碑・句碑・記念碑めぐり(2)」『二風谷アイヌ語教室 広報紙』33号、二風谷アイヌ語教室、1994年11月、を参照した)。

(22) 萱野茂『アイヌの民具』、すずさわ書店、1978年、290頁。

(23) 北海道新聞社寄贈資料、収蔵番号11500~11502。なお筆者が見せていただいたかぎりでは、「戦勝祈願」らしい特徴と判断できるものは確認できなかった。

(24) 知里真志保「分類アイヌ語辞典 植物編」『知里真志保著作集』別巻1、平凡社、1976年、7頁。この人形の呼称はいくつかあるが、ここでいう「チニシュツカムイ」は「我ら 祈る 神」の意味である(奥田統己さんの教示による)。アイヌがヨモギに「除魔力」を認めていたことについては同書1頁以下を、人形の形態については前掲萱野茂『アイヌの民具』273頁などを参照。

(25) この点については、知里真志保「アイヌに伝承される歌舞詩曲に関する調査研究」『知里真志保著作集』第2巻、平凡社、1973年、所収(初出は「文化財委託研究報告」2、文部省文化財保護委員会、1960年)の34~35頁を参照した。

この行進はイナウの前までやってくると「円陣を作って回」り、やがて「イナウに向かって、左の端に長老が、それから右へと次々に幾列かに並」び、「隊列が整うといよいよ祈りの言葉が捧げられる」。カムイノミの言葉はみだりに他言しないものなのだが、後藤は「アイヌの人達がかくも熱心に戦勝の祈願をこめていることを一般に知らせたいから、と無理に願って」、貝沢清太郎の祈り言葉を聞き出している。ただ、おそらく後藤の聞き取りの誤りと考えられる箇所が少くない。このたび、萱野茂さんに、父・清太郎の言葉だということもあってこの資料をお見せしたところ、後藤の記述からもととの言葉を推測し、日本語訳を付して下さったので、以下に掲げることにする。果たして貝沢清太郎が後藤に対して祈り言葉の全てをありのままに語ったのかどうか、後藤が清太郎の語った言葉の全てを記録したのかどうかなど、留保の必要な点はいくつかあるが、ひとたびこうして紹介された祈り言葉を、少しでも実際のアイヌ語に近づけて“復元”しておく意味はあろう。左が後藤の記述、真ん中が萱野さんによる解釈、そして右が萱野さんによるその日本語訳である。

チャンブンキ	チャンブンキ	とりでを守る
イクレランマツ	イクレラリマツ	威風ある ⁽²⁶⁾ 女
シビチャリエムコ	シビチャリエムコ	静内の方の
ヌプリクルウカ	ヌプリクルカ	山の上へ
アオランケカムイ	アオランケカムイ	降臨された神
レコロオカツ	レコロカトゥ	その名前は
ニセランカムイ	ニシエランカムイ	雲それ降りる神
タントンコトワシイ	タントコトゥワシケコシ	今日その神を力に頼み
コシュウアコラモシリ	アコロモシリ	私達の国土
シュチュラカタ	シチュプカカタ	東の方で
トンナタラ	トンナタラ	光り輝き
イキネイデカ	イキネイベカ	万がいちにも
チアンヌルト	チアンヌルトウ	他人あつかい
アイエカラカンナ	アイイエカラカナ	されないように
クエアイタカ	クイエアイタッ	私の言った言葉
イタツクレウカン	イタツクルカシ	言葉の上に
チコホサリ	チコホサリ	顔を向けられることを
アイエカラカンナ	アイネカラカンナ	私は願いたい
アムイパベトッコ	カムイパウエトッ	神が言うと

(26) この言葉のみ、田村すゞ子『アイヌ語音声資料(1～6)語彙』上巻、早稲田大学語学教育研究所、1991年により、「イクレラリ(ikurerari)」「ひと・影・で・押さえつける、すなわち、ひとを威圧するような、威風堂々とした、などの意味」と判断した。

アイヌカタプ	アイヌカタッ	アイヌたちも
ネツブカケクルーカ	ネブカクルカ	それらのことに
コイカオバシ	コイカオバシ	駆けつけるもの
イタクトル	イタクトウル	言葉の間が
ウハイダヤクン	ウハイタヤクン	足りなければ
ヤエーカトエン	ヤイエカトゥウエン	恥ずかしいが
カムインリカルコロ	カムイインカルコロ	神は見ながら
エコリカオバシ	エコイカオバシ	神が駆けつけ
クルカシーケタ	クルカシーケタ	その上で
ナコロモシリ	タナコロモシリ	私達のこの国土の
ラマツチャアキヤクン	ラマツサツヤクン	魂が無くなったら
アイヌパテツケ	アイヌパテツヘ	アイヌばかりが
コハイダクニツ	コハタニツ	恥をかくのでは
シュモネナンゴロ	ソモネナンコロ	ないでありましょう
カムイネロツコロ	カムイネロツクル	神であるあなた方の
ケウシュモロケ	ケウトゥムモロケ	その精神が
エホーサリデ	エホーサリレ	こちらへ向くこと
パツノウクエ	パッノウクイエ	ここまで私は言うけれど
クエアイダツカ	クイエアイタツカ	私が言った言葉
シエレーマカシ	セレマツカシ	その心髄に神が
チコーサリ	チコホサリ	顔を向けられることを
アイネカラカンナ	アイネカラカラナ	私は願うものです

ウ：萱野茂は、「父から聞いた話」として、「昭和一九年夏」に「沙流川流域のアイヌが平取市街上手のオキクルミ像の前に集まり、アイヌの神々に戦勝祈願をした」ことを紹介している⁽²⁷⁾。ただしこの事例は、時期がイに近く、集まったアイヌも「沙流川流域」という点はほぼ共通しており、「オキクルミ像」はこの当時義経神社の入り口にあったというから場所もほぼ同じであるなど、イと同じものだった可能性がある。しかし他方、萱野茂が父・貝沢清太郎と「一緒にお祈りした」者として紹介している貝沢金次郎は、イの後藤の記録に名前が出てこない（もちろん、だからといって参加していなかったということにはならないが）し、後述するようにこの種の「戦勝祈願」はこのころ各地で少なからず行われていたようであるから、3月にやったあと夏に再び行なったとしても不思議ではないので、ここではこの点についての速断を避けておく。

この萱野茂の叙述の中で着目すべきことの一つは、このカムイノミのことを「『トゥミ セレマ

(27) 萱野茂「ヤイ ニコロ オンマした金次郎さん」『おれの二風谷』、すずさわ書店、1975年、179～180頁。

クウ』と称して」いたと記していることである⁽²⁸⁾。川上勇治も「トゥミ セルマック」という呼称を用いている。

いま一つは、金次郎が唱えることになっていた祈り言葉の一部を紹介していることである。次のような言葉である。「ウェンレブンクル コロエムシ エムシクルカシ コシコポプ ヤウンシサム コロエムシ エムシクルカシ コトンナタラ」、萱野による日本語訳は「悪い外人の 持っている刀 刀の上に 錆が出て 日本人の 持つ刀 刀の上が 光輝き」である。

エ：1943～44年頃 ペナコリ（現平取町荷負）にて

川上勇治さんが「戦争が勝てるように神に祈る儀式さかんにやったのを見たことあるんだ」と語っている⁽²⁹⁾のを読み、それについて川上さんに教えていただいたものである。川上さんによれば、挙行の時期は1943年か44年で、エカン達が行進する光景も見たとのことだから、前記のウニウェンテを行ったのだろう。また役人らが参列したのかどうかについては、そのような記憶はなく、参加していたのは主にペナコリの者たちで、コタンの人々が進んで挙行したのではないか、とのことだった。

オ：1939年？ 静内入船町不動社前

この不動社は現在シャクシャイン記念館のある真歌の丘に通じる急坂（不動坂）を少し登ったところにある。静内町郷土館がこのときの写真の複写を所蔵している。この写真を寄贈した狩野義美さんによれば、1939年、「支那事変」の「戦勝祈願」として挙行されたカムイノミだとのことである。写真には40人余が写っており、ヌサの後方に日の丸の旗が2本見える。

なお藤本英夫は、「戦争中、あのシャクシャインのチャシ＜砦＞のある不動サンで戦勝祈願のカムイ・ノミ＜神への祈り＞をやったことがあったナー」という回想を紹介しており⁽³⁰⁾、上田満男も「戦争中、戦勝祈願の形でカムイノミが真歌不動坂で行われた」⁽³¹⁾と記している。両者のいう「戦勝祈願」が同じときのものなのか、また上記の写真のものと同じなのかどうか、いずれも定かではない。このほか、葛野辰次郎は、戦勝祈願のカムイノミを「この辺でもやったのか」という川上勇治の問いに「ああ、やった、やった」と答えている。これも上記の不動坂でのものと同じである可能性もあるが、葛野の住む東別は真歌とはやや距離があり、別のカムイノミを指しているかもしれない。

ここで筆者が着目しているのは、藤本や上田の叙述には、この戦勝祈願がシャクシャインを意識したカムイノミであることがうかがえる点である。後年、「シャクシャイン供養祭」の開催を報

(28) 「トゥミ (tumi)」は「戦い」、「セレマク (sermak)」は「～の背後（にあるもの）」「人の陰にあってその守りとなるもの」という意味である（久保寺逸彦『アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究』、岩波書店、1977年、を参照した）。「ウク」はukすなわち「取る、受け取る」であろうか。

(29) 葛野辰次郎への聞き取りの中での発言。アイヌ民族の現在と未来を考える会編『明日を創るアイヌ民族』、未来社、1988年、157頁。

(30) 藤本英夫『アイヌの国から—鷺塚鷺五郎の世界—』、草風館、1986年、75頁。

(31) 上田満男『わたしの北海道—アイヌ・開拓使—』、すずさわ書店、1977年、313頁。

じる新聞記事の中にも、「戦後しばらく途絶えていたアイヌ民族の大酋長シャクシャインをたたえるシャクシャイン祭り」という表現⁽³²⁾があり、戦前にも「シャクシャインをたたえる」儀式があったというニュアンスがうかがえる。これらの「戦勝祈願」のカムイノミではどんなカムイに祈ったのか、またその祈り言葉はどんな内容だったのか、といった点を調べることであれば、こうした点を解くことができるかもしれない。

また、この不動社の由来などについて、そこがシャクシャインのチャシの麓であることとの関わりがないかどうかといった点にも関心を持ったが、この社の由来や建立の時期などについてはよくわからなかった。

上記ア～オの事例は、実際に執り行われたであろう「戦勝祈願」の、ほんの一部にすぎない⁽³³⁾。今後なおいっそうの調査が必要ではあるが、おおよそ次のような傾向を指摘しておく。

第一に、かかる「戦勝祈願」には、大別して、行政の関与による挙行という要素と、コタンの人々による自発的な挙行という要素の二つの側面がある。もちろんどのカムイノミにもこの二つがそれぞれに備わっているだろうし、いずれの場合でも少なくとも後者の要素は皆無ではないだろうと筆者は考えている。上記エは後者の要素が強い例だろう。他方、イの場合は平取村長も「参列」していたという⁽³⁴⁾から、前者の要素が少なからずあったようであり、アやイが、いずれも村社すなわち村内で最も格式の高い神社での挙行である点も、このことと無縁ではないだろうと考えている。

第二に、これは川上勇治さんからの示唆でもあるのだが、上記アイウエがいずれも1943年以降であることは偶然ではないのではないか、ということである。つまり、こうした「戦勝祈願」は、日本の戦局の悪化⁽³⁵⁾につれて危機感に迫られ挙行するようになっていった、という側面がうかがえるのである。上に引いた祈り言葉には「国土」を「守る」という意味あいの言葉が多いことや、イで強力な除魔力をもつヨモギ人形を用いているのも、こうした性格を反映しているのかもしれない。

III 「戦勝祈願」のカムイノミの周辺

1. かかる「戦勝祈願」はこの戦争のときが初めてではない。例えば武隈徳三郎は、「日露戦役の当時、アイヌは漸く国家的観念を深くしたるものゝ如し。我國の勝つべく神に願ひたる祈禱會は勇壯にしてその言葉は厳肅なりき」との回想を記している⁽³⁶⁾。上記Ⅱのイを報じた『北海道新聞』

(32) 「シャクシャイン祭復活」『日高報知新聞』1953年10月29日付。

(33) 具体的な調査は今後の課題であるが、この付近に限っても平取村字貫気別や門別村で同様のカムイノミが行われている。

(34) 「神州護持の祈り捧ぐ／平取コタンの必勝祈願」『北海道新聞』1944年3月27日付。

(35) 米軍の「本土」初空襲が1942年4月、日本軍が多数の戦死者を出したガダルカナル島での戦闘が同年末、アッツ島の日本軍全滅が1943年5月のことである。このことは、このころから召集される者が増え、十軒余りのコタンから3名も入営していった、という黒川せつさんの体験に照合してみるとリアリティを増す。

(36) 武隈徳三郎『アイヌ物語』、富貴堂、1918年、29頁。この点については筆者は以前にごく断片的に触れたことがある（前掲小川「徴兵・軍隊とアイヌ教育」44頁）。

記事も、「日露戦役以来のコタンの必勝祈願」と述べており⁽³⁷⁾ 少なくとも日露戦争時にはかかる「戦勝祈願」があったことを確認できる⁽³⁸⁾。武隈は上記の回想を、「事変又は変死等の場合に於ける」悪魔払いの行進についての説明に続けて「思い出づるまゝ筆の序で」に記しており、彼が見た「戦勝祈願」でもこの行進を行っていた可能性をうかがわせる。ただ、あくまで筆者の感触の限りでは事例は少なく、この点が第二次世界大戦期、特にその末期との差ではなかろうか。

2. コタンには「カムイノミできるエカシはたくさんいた」「何かあったらカムイノミしていた」(いずれも、黒川せつさんの談による)ほどに伝統文化が色濃く存続していたこの時期、「戦勝祈願」以外にも数々の伝統文化の営みがあったことはもちろんである。

戦争との関わりだけに限ってみても、次のようなことがらを挙げることができる。

ア：出征者の壮行のさいのカムイノミの例については、「はじめに」で荷負・ペナコリの例を紹介したが、静内町東別の葛野辰次郎は、自分が聞いたときの祈り言葉について次のように語っている：「その内容は、今この家の若者が召されて戦いに出て行くのですが、神々のご加護によりまして、どうかこの若者が無事に帰ってこれますように、神々よお守り下さい、と言うような言葉なんだ。言葉の中になんかはげしい言葉があって、陸の戦いであれば敵を土とともにきったぎり、土とともにうちつける、それから、海の戦いであれば、海水とともにきったぎり、海水とともにうちつける、それから、空中の戦いであれば、飛行機だな、空とともにきったぎり、空とともにうちつける、そして日本の武器は東の方で太陽とともに光り輝き、敵の武器は、西の方で、沈んでしまえと言うようなのが言葉の中に入ってるんだ」⁽³⁹⁾。

このほかにも、出征した者の無事を祈るカムイノミ、あるいは出征した者が無事に帰ってきたときの報告とお礼のカムイノミなどがあった。貫気別の黒川せつさんから聞いたことによれば、前者の場合、自分の家から兵隊を出した家も、出してない家も、一軒から一人はコタンのヌサに集まって、エカシが「こんな小さい部落から、男ばかり、若いものばかり、3人も4人も、遠いレブンコタンに行っているけれども、どこにでも神様はいるはずだから、守ってやってください、そして無事にこの部落に届けてくれるように」という意味のお祈りをしていたとのことである。後者の場合は、「おかげさまで、この小さいコタンから戦争に行ったけれども、神様が守ってくれたから、おかげで無事帰ってこれました」という意味のカムイノミを、一人ひとりが帰ってくるごとにやっていたという。また、もし不幸にして亡くなって帰ってきたら、ニウエンホリッパをやるのだそうである。

そのほか、これも黒川せつさんから聞いたものだが、1945年8月15日のいわゆる玉音放送の後に貫気別のコタンの人たちはカムイノミしていたという。そのときの祈りの内容は、神様にお祈りしたけれども戦争に勝つことはできなかった、と報告するとともに、けれども兵隊に行った人た

⁽³⁷⁾ 前掲『北海道新聞社』1944年3月27日付。

⁽³⁸⁾ それより以前、例えば日清戦争当時については今のところ確認できない(前掲小川「徴兵・軍隊とアイヌ教育」46頁注2も参照)。また日露戦争以後1930年代までの間については未調査である。

⁽³⁹⁾ 前掲『明日を創るアイヌ民族』、157頁)。

ちはみな無事で帰ってきますように、という、神への報告とお礼とまだ帰って来ない人の無事を祈るものだったとのことである。

イ：出征者にイナウなどのお守りを持たせている事例もいくつか確認できる。秋辺福太郎（1916年釧路春採生まれ）は「長さ10cmほどの小さなイナウ」をお守りとして持って行き、「袋に入れ、たすきにして背にゆわえつけておいた」という⁽⁴⁰⁾。弟子豊治（1923年屈斜路生まれ）も、祖父・弟子小太郎が持たせたイナウを、「つねに腰にさげていた」という⁽⁴¹⁾。葛野辰次郎も、1944年に召集されたときに「見守ってくれる神として」イナウを「作ってもらっ」ている⁽⁴²⁾。

このほか、萱野茂によれば、兄・貝沢勝美の入営（1939年）のとき、「父はいつも飲み水を汲む湧き水のあるポンオサツ沢へ行き、小指の頭くらいの小さい石を2個拾いあげ」て、水の神に「あなたが今まで育ててくださった長男勝美が遠い所へ兵隊として行かされることになりました。この石は水の神あなたの分身として子供に持たせます。遠い所で間違っ濁り水を飲んだときでも、あなたのお力でそのにごりを鎮め、無事に役目を終えて村へ帰ってくるようにお守りください」と祈り、家に持って帰って「火の神にもお願いしてから」その小石を持たせている⁽⁴³⁾。

3. IIやIII-2に述べたようなことが全てのアイヌにあてはまるわけではない点は断っておかねばならない。上記の事例は伝統文化を比較的強く存続させた日高地方のものが多く、全道に当てはめることができるかどうかは速断できない。筆者が聞き取りをした範囲でも、特にアイヌブリによるお守りなどは持たずに出征したという人はいるし、幕別町蝦夷文化考古館には、「大東亜戦争」に際して白人神社で、明らかに神道式の祈願を行った様子を示す写真がある。

当然のことながら、シャモたちによる日本の神道にのっとった「戦勝祈願」も行われていた。例えば1944年8月、内務省は訓令27号「必勝祈願勤行ニ関スル件」を発し、これを受けて北海道庁も同年9月5日、同名の通牒を発して「必勝祈願」の「行事次第」や「必勝祈願詞」の文例を示している⁽⁴⁴⁾。筆者が最近手にした文献の中でも、「（昭和一筆者注）19年頃にはかなり戦況も悪化していたわけですが、神社の本殿に上がって戦勝祈願の祝詞を神主さんに従って唱えたりしてましてねえ」⁽⁴⁵⁾といった体験談を見ることができる。こうした祈願に参加したアイヌも多かったはずである。「北海道旧土人保護法」施行から数えても40年近くを経たこの時期、アイヌブリによるお守りやお祈りから遠ざかろうとしたアイヌは少なくないだろう。カムイノミを行うほどに伝統文化への造詣を持っている者も、多くは神社での神道祈願にも参加していたろう。

(40) 『昭和60年度 アイヌ民俗文化財調査報告書 アイヌ民俗調査V』、北海道教育委員会、1986年3月、72頁。同書はこのイナウの図も掲載している。

(41) 橋本進「南北の塔」『文化評論』213号、1979年1月、196頁。橋本によれば、「敗戦後、米軍収容所に入れられたとき、イナウはとり上げられたが、弟子さんは、『私は北海道のアイヌだ。アイヌの守り神をかえしてもらいたい』と強く交渉、とりもどした」という。弟子については前掲橋本進編『沖縄戦とアイヌ兵士』を参照。

(42) 『平成4年度 アイヌ無形民俗文化財記録刊行シリーズVI アイヌのくらしと言葉3』、北海道教育委員会、1993年3月、145頁。

(43) 萱野茂「兵隊に行った兄と小石」前掲『おれの二風谷』、15頁。

(44) 申兵第715号、内政部長発各支庁長市町村長官国幣宮司宛。『北海道庁広報』3486号。

(45) 中島孝雄「焼跡少年 2」『三省堂 ブックレット』113、1995年1月、83頁。大阪府高槻での体験談である。

同様に、「戦勝祈願」や出征者の壮行のカムイノミは、伝統的なアイヌプリー色の中にあったわけでもない。川上勇治の回想する出征者の送別の席は、カムイノミの後の夜の宴会では「飲むほどに、酔うほどに、最後はどうしてもアイヌのヤイサマ踊りに変り……ホリッパを踊りだ」した⁽⁴⁶⁾が、出征する川上守ら「若者」は、ホリッパも踊ったけれども軍歌を歌ってもいたのである。

4. 後藤寿一は、IIのイについて、「この祈願祭はアイヌの特色をあまりに明瞭に現わすものであり、かようなことをするから吾々一族はいつまでもアイヌでなければならぬのだ」と反対する「一部の若者」や、「アイヌとして待遇されることを極端に嫌い、今回の祈願祭に対してもアイヌの風習によることに不賛成を唱え、やるなら立派に日本人としてやり……天照大神を祀ってやれ」と主張する鹿戸市之助らがいたことを記している。ここにいう「アイヌの特色」とは、ことさらにアイヌ民族の「異」俗ばかりを強調するシャモの視線を意識するゆえの言葉だろう。鹿戸がいう「アイヌとして」の「待遇」とは、「北海道旧土人保護法」の存在が象徴するような、「保護を受ける」存在というシャモからのレッテルのことを指しているだろう。

IV むすび

1. 以上の検討は、ごく限られた事例についての、限られた資料による、未熟なノートにすぎない。せっきくの資料や聞かせていただいたお話を活かしていない点も多い。それでも、アイヌ政策の展開とこれに対するアイヌ民族の抵抗という枠組みによる歴史叙述でもなく、伝統文化についてもっばらその存続の度合い如何という視点で論じるものでもない、歴史の一コマを捉える方法の試みにはなったかと思う。

2. 戦争とアイヌ語・アイヌ文化の関わりというのは重要なテーマだと改めて気づかされたのは、1992年12月に札幌で開催されたあるシンポジウムでの笹村二朗の次のような発言を聞いたときである。

「……私の母親、この母親はアイヌ語しゃべりました。それで例えば戦争中にみんな集まって、そしてすぐ歌が出るわけです。そうすると、私がちょうど小学校に入って早々ですからちょうど戦争が始まった頃なんですけれども、ある晩皆さんがた家に集まって歌を歌っていたらそこへ巡査—今の警察官ですね—これが来まして、『アイヌ語をしゃべるな、お前ら何をやっているんだ。歌うんなら軍歌でも歌え』というように怒られました。それを私は子ども心に覚えております」⁽⁴⁷⁾

大学の教育史学の研究室に学んでいた筆者は、戦時下における朝鮮語や沖縄方言に対する厳し

(46) 前掲『サルウシクル物語』、242頁。

(47) 『記録集 シンポジウム 国際先住民年とアイヌ民族の人権』、1992年世界人権ウィークin北海道実行委員会、1993年、53～54頁。

い抑圧を聞きかじってはいた。それなのに、こうしたことがらと相通じ、かつアイヌ史の特質を見通せるような視点を設定できないでいた。アイヌブリによるカムイノミが新聞などに掲載され賞揚される光景は、朝鮮における「創氏改名」の強行や沖縄におけるユタの取締のような、固有の文化への徹底した弾圧とは位相を異にする。シャクシャインという日本国家に抗して蜂起したアイヌゆかりの地でのカムイノミがあったことには、近世以来の支配の積み重ねゆえの日本国家の「寛容さ」も見えかくれる。しかし上記の検討から、こうした「寛容さ」を示すほどの統合策の徹底ぶりの中に、次の二つの点をうかがうことができるのである。

3. 戦時下の新聞は、アイヌ民族の「国策」協力を報じる記事をしばしば掲載している。「余市へ木炭救援／旧土人が炭焼き」⁽⁴⁸⁾といった記事は「生産」動員に尽力するアイヌの「時局的自覚」を伝え、「遺骨を抱く老酋長／愛児を国に捧げてニコリ」⁽⁴⁹⁾などの記事はアイヌ民族も日本の戦争に出征することで『滅亡』ではなくて『建設』の民族に変わって⁽⁵⁰⁾いけるのだと論じ、「冠婚葬祭に酒を用ひず／白人部落が率先、旧習を打破」⁽⁵⁰⁾という記事は「国民生活の改善」という規律を「率先」して実行するコタンをたたえている。これらの記事は、確かに一面では実態を反映しているだろう。上記Ⅱのイにおいても、これを企画した者たちは、「祈願祭」への「寄付金」（これが、いっばんにカムイノミの時に各戸が持ち寄るお供えものの延長なのか、「戦勝祈願」ゆえの特別なものなのかは判断できない）の余りは「国防献金」するつもりだと語っている。「大日本帝国」の戦争遂行に積極的に参画しようとする中で、「滅亡」「旧習」といったレッテルを脱する途を求めた者は少なくなかった。

ここで問題にしたいのは、こうした報道には自ずと表裏二つの側面が表れているということである。一つは、言うまでもなくアイヌ民族統合の徹底ぶりを喧伝するトーンである。この背景あるいは基盤に、アイヌ「同化」政策がほぼ「完了」しつつあると謳う政策動向を指摘することができる。1937年「北海道旧土人保護法」改正のさい道庁内で中心的な役割を果たした喜多章明は、この改正における「保護」事業の柱の一つである「住宅改良」が終了する予定の15年後には、「北海道旧土人保護法」を廃止し「アイヌを差別待遇から解放して和人化」し、「将来全くアイヌなるものは我が国から姿を消す」だろうという展望を語っている⁽⁵¹⁾。アイヌの「国策」協力、「臣道実践」の姿を報じることは、それほどまでに日本国家によるアイヌ民族統合が徹底したことの宣伝になっているのである。「戦勝祈願」のカムイノミもまた、かかる宣伝の素材になる。1941年、「日本が国内の先住民族のアイヌをその御稜威の光で皇化しつゝある偉大な現況をクランクに収める」⁽⁵²⁾という謳い文句で理研映画が撮影した映画「北の同胞」にも、その終盤に、戦死者の遺骨を

(48) 『北海タイムス』1940年9月19日付。

(49) 『北海タイムス』1940年11月20日付。

(50) 『北海タイムス』1941年1月15日付。

(51) 「こゝ十五年後には旧土人保護法を撤廃」『旭川新聞』1937年2月17日付市内面。ただし、この喜多の言葉が、アイヌの間で「北海道旧土人保護法」撤廃要求が強かった旭川での談話である点には留意しておきたい。

(52) 「アイヌの映画／北方の同胞／完成後は盟邦へ贈る」『北海タイムス』1941年6月15日付夕刊。

「古式の刀を振って」迎える「荘厳な式」と「出征する若者の為に戦勝を祈願する部落の人達」のシーンとがある⁽⁵³⁾。

いま一つは、こうした「同化」の徹底ぶりの宣伝の中に、「同化」「融合」などとは相反する要素が見えていることである。つまり、アイヌの「国策」協力の宣伝は、「アイヌ」という言葉を見出しに使い、あるいはことさらに伝統的な風俗を強調することによっている。また、これらの宣伝の論調は、必ずシャモを中心に置いて、アイヌ民族をそこから区別して扱っている。IIーアについての新聞記事の「アイヌ達の心持ちは本当に立派ではありませんか」という言い方はその例である。Iについての新聞記事が「純情なコタンの人達」（下線は小川）という言い方をしている点も見逃せない。

こうした宣伝のあり方は、アイヌ政策やシャモの意識・態度を反映していることを付け加えておきたい。例えば1943年、道庁は、給与地の賃貸が多いコタンの現状は「指導精神ニ副ハザル……甚ダ遺憾」な事態になるとして、「同族部落ノ向上発展」の「指導的人物養成」を目的としたアイヌの「農事実習生」の募集を開始している。アイヌ民族の「同化」「融合」をうたっている為政者自身が、特にアイヌ民族を対象とした施策を行なう必要を認めている点を確認しておきたい⁽⁵⁴⁾。別の例では、1941年4月17日付け『北海タイムス』が掲載したペンネーム「白老コタン生」の投書を挙げておく。投書は「この超非常時局下」にも「アイヌ見物客」が後を絶たないことを指摘し、「我等は自尊心を傷つけられ限りなき憎悪の念を抱く」と批判した。シャモに伍そうとするアイヌの要求や行動にもかかわらず、依然としてアイヌを「見物」の対象にするシャモが多数いたのである。

「戦勝祈願」のカムイノミは、アイヌ民族の「古俗」を強調し、そして「国策」への傾倒を示すことができる点で、こうした宣伝の格好の素材の一つだった。アイヌが参加した「戦勝祈願」はアイヌブリによるものだけではなかったことは既に指摘した通りである。だからこそなおさら、カムイノミの報道はきわだつのである。IIーIに対して、「アイヌの特色」を「現わす」ことを憂慮し、「（戦勝祈願を一筆者注）旧土人がやったというようなことは……新聞記事においてもこの言葉を使ってくれるな」と述べる鹿戸らの批判はこの点を鋭く衝いていたのである。そしてこの「戦勝祈願」を報じた『北海道新聞』記事は、確かに「アイヌ」「旧土人」という言葉を使っていない（もっとも、これが鹿戸らの批判を容れてのことなのかどうかはわからない）。だが記事の見出しが「平取コタン」と言い方をしたその瞬間に、それがアイヌ民族による「必勝祈願」なのだという事は明白である。まして、ヌサの前で刀を振りかざす男たちをとらえた写真を掲載しており、伝統的な「風俗」もしっかりと強調されている。そうであるからこそ、新聞にとってこの

(53) 「北の同胞 シナリオ」『文化映画』6号、1941年6月。雑誌『文化映画』についてはチュプチセコルさんから教示を受けた。なお、この映画が完成・公開されたかどうかは確かめることができなかった。

(54) 引用部分は北海道庁照会「旧土人農事実習生ノ推薦ニ関スル件」、未社784号、内政部長発関係各支庁長支庁村長宛、1943年3月14日。ただしこの事業のその後の経過はよくわからず、実施されなかった可能性もある。前述した「住宅改良」事業も1943年度以後は実施された形跡はない。為政者は戦争遂行の一環としてアイヌ政策を推進する必要を感じていたにもかかわらず、自らの行為である戦争によってそれが不可能になっていった、という自己矛盾を起こしていたのである。

記事は、紙面の少なくなったこの時期にわざわざ写真入りで報じる「価値」を持つのである。鹿戸らの要求は決してかなうことはない、という点が重要である。

4. いま一つは、カムイノミの言葉は、あくまで出征者の無事や「国土」の無事を祈ったりすることが中心であり、少なくとも、新聞などが「烈々の敵愾心」「鬼畜米英を撃滅せよ」といった形容をくりかえしていることとはやや距離がある。冒頭でも述べた通り、祈り言葉を語る者が意図的にそういう言葉を選んだのかどうかはわからない。筆者は、カムイノミを行なった者たちはそれぞれに真摯に祈ったのであり、だからこそ、伝統的なカムイノミに則った言葉を語ったのであり、そこに「国策」や喧伝との微妙なズレが生じていた、と理解したい。

カムイノミの挙行に反対する鹿戸も、「民族協和」にもとづく「国策遂行」に積極的であろうとするがゆえに「差別的待遇」への批判を展開したのである⁽⁵⁵⁾。ここに、カムイノミを行なう者と、それに反対する者と、それぞれの真剣な想いと営みとが、共にシャモや日本国家による「国策」遂行や「同化」の「完成」といった言説とのズレをもたらししていることを確認できよう。アイヌ民族が「国策」に積極的に呼応しようとし、たしかにそうした「国策」への協力や動員がコタンにも及ぶ。と同時に、そのことによって「国策」とのズレが生じる、という一見矛盾した構造がここにある。

かかるズレを含んで、日本の敗戦を迎えることになる。戦後のアイヌ史の起点の一つはここにあるのではないか、というのが筆者の仮説である。

<凡例>

1、資料の引用に際して、原資料における漢字の旧字体、異字、変体仮名は、原則として常用の漢字と仮名文字に改めた。中略した箇所は「……」で表した。新聞記事の見出しが複数ある場合は、「／」で区切って表示した。

2、直接に面談し教示を受けた場合を除き、文中での敬称は省略した。

<付記>

本稿のための調査研究のなかで、次の方々にお世話になった。

1. 本稿のための調査の過程で、1994年10月23日に平取町荷負の川上勇治さんと同町貫気別の黒川せつさんから、95年1月14日に静内町の狩野義美さんから、同月15日に再び黒川せつさんから、聞き取り調査を行った。狩野さんは古原敏弘さんからの、黒川さんは川上さんからのご紹介による。

これらの聞き取りを通じて触発されたことなしには本稿は執筆できなかったであろう。

2. 萱野茂さんには、本文中にも記したとおり、貝沢清太郎の祈り言葉の日本語訳について教示をいただいた。

3. 北海道新聞社関係資料について、出利葉浩司さんと桑原真人さんにご教示などをいただいた。

(55) 後藤は、「産業戦士として入村」する朝鮮人の「団体」（これは事実上強制連行された人々であったろう）の宿泊を平取の旅館が拒んでいることに対し、鹿戸がその「差別的待遇」がもたらす「支障」「悪影響」を批判しているさまを記している。

On the *Kamuynomis* (Prayers for the Gods) for Japanese victory during World War II

OGAWA Masahito

Summary

This paper investigates an aspect of Ainu history during World War II in Japan.

During World War II, especially in the last few years, there were many prayers for victory offered at Shinto shrines by the Japanese people. In the same period, there are also some instances of *Kamuynomis* being held by the Ainu people for Japanese victory.

At first glance, these *Kamuynomis* look like an expression of the success of the assimilation policy towards the Ainu people by the Japanese government. This is generally true, but there are two important elements which reflect self-contradictions in the doctrine of assimilationism towards the Ainu people.

1. At these *Kamuynomis*, Ainu people prayed to the Gods faithfully according to traditional beliefs, so the words of the prayers were, for example, "please save our lands" or "please save our sons and husbands." These words differ from the aggressive and suicidal wishes of the Japanese, despite the fact that the Ainu sincerely wished for Japanese victory.

2. Japanese newspapers always used the words "Ainu" "Former aborigines" when they reported these *Kamuynomis*. These reports not only brought criticisms from the Ainu people themselves, but also contradicted propaganda concerning the assimilation policy towards the Ainu people.

key words: Ainu history, *kamuynomi*, World War II